

# 音調句からみた東京方言談話の対人的変異

齋藤 有紀恵

(慶北大学校語学教育院・専任講師)

キーワード：東京方言談話 親疎関係 音調句 語 音声教育への応用

## 要旨：

本研究では、東京方言話者の話しことばを対象とし、話者間の親疎関係と発話の長さに相関があるかどうか調査分析した。被調査者は3名(A、B、C)であり、A対Bは[親・同輩]の関係に、A対C、B対Cは[疎・目上目下]の関係にある。分析対象とした談話では、同一新聞記事に対する意見交換を行っている。

分析には「句」という単位を用いた。句とは、沖(2001)が談話の最小単位として定義した音調的単位である。従来の研究ではテキストの構成単位を文とする研究が多いが、実際の談話を文で区切るとは困難である。また、談話はより音声に依拠するという性質ももつ。このような観点から本研究では「句」を単位とした。ただし文法的単位の句と区別するため本論では「音調句」と呼ぶ。

各談話において、発話権所有時の発話を音調句で区切り、橋本(1934)が定義する「語」を尺度として各音調句の長さを測定した。その結果、対人関係により一音調句の長さが増減することが明らかになった。つまり、相手と[親・同輩]の関係にある談話では音調句がより短く構成され、[疎・目上目下]の関係にある談話ではより長く構成される傾向が指摘できた。

この要因としては「敬語使用」「相手との心理的距離感」「自己の意見に対する確信度」が考えられる。

## 1. はじめに

談話相手との関係によることばの使い分けには様々な側面がある。話者間の親疎関係と、使用される文の長さに相関があることは既に報告されている。野元(国立国語研究所 1983所収)は、生成された文が長いほど丁寧であることを報告している。野元の記述は、面接調査から得られた多量の発話文が根拠となっている。被調査者に15の場面を提示し、実際に話すと考える文を提出させ、提出させた「反応文」を分析しているのである。面接調査の場合、発話するまでに時間をかけることができ、言い直すこともできる。この点で、実際に進行している談話

での発話とは性質が異なるといえる。そこで本研究では実際の話しことば資料を収録し、話者間の親疎関係と発話の長さに相関があるかどうかを調査分析した。本研究で用いた談話資料は東京方言話者によるものであり、本論では東京方言談話とよぶ。

分析には「句」という単位を用いた。句とは、沖(2001)が談話の最小単位として定義した音調的単位である。野元(国研1983)では、「文」を分析しているが、実際の談話を文で区切ることは困難である。なぜなら、談話では言語的コンテキスト及び非言語的コンテキストに依存した発話が存在し、省略も見られ、一文として完結しない発話が少なくないからである。また、談話はより音声に依拠するという性質も持つ。このような観点から、本研究では沖(2001)が提唱する「句」を単位とする。ただし、文法的単位の句との混同を避けるため、以後「音調句」という語を用いる。

本論では、東京方言談話を音調句で区切ることを試みた。その結果、対人関係により一音調句の長さが変わることが明らかとなった。また、音調句認定に際し、再考すべき問題の存在も明らかとなった。

## 2. 調査の概要と方法

### 2.1 話者

東京方言談話に参加した話者は3名である。各話者の属性は以下の通りである。

話者A (被調査者)	東京都足立区出身	20歳	女性
話者B (被調査者)	東京都江東区出身	20歳	女性
話者C (調査者)	長野県松本市出身	45歳	女性

話者A話者Bは、両親が共に東京都区内出身者であり、当人も東京都区内出身の東京方言話者である。両者とも東京都内の同じ大学に通う大学生で、同じサークルに所属する友人関係にある。話者Cは談話資料の収録者であり、調査者として談話に関与していた。話者A Bと話者Cは、第一回目の談話収録の際に初めて対面した関係にあり、第二回目の調査時にもほぼ初対面の間柄にある。つまり、話者Aと話者Bの関係は[親・同輩]であり、話者A対話者C、話者B対話者Cは[疎・目上目下]の関係にあるといえることができる。

## 2.2 談話資料

分析対象とする東京方言談話は以下の3種類である。

談話① 話者A 話者B (24分)

談話② 話者A 話者C (18分)

談話③ 話者B 話者C (29分)

談話①は2000年10月に収録し、談話②と談話③は1ヶ月後の2000年11月に収録を行った。収録はDATでの録音と、デジタルビデオカメラでの録画を行った。談話収録は両日3時間ずつ行っており、上記3種類はそのうちの一部である。話者Cは、談話調査者として全体の進行を管理し、話者AB両者への説明等を行っていた。

談話①から③のいずれの談話も、同一新聞記事に対する意見交換を行っている。人生相談を内容とする記事に対して自己の意見をまとめ、その後意見交換を行った。相談者にとってよりよい意見を構築するという課題が与えられていたが、思ったことを自由に話すことができる状況下にあったといえる。おおよその調査時間は設定されたが、意見がまとまり次第終了としたため談話間に所用時間の差が生じた。

## 2.3 分析単位 — 談話単位としての音調句 —

従来の研究では、テキストの構成単位を文とする研究が多いが、実際の談話を観察した時、それを文で区切ることは困難であった。なぜなら、非言語的コンテクストに依拠した発話、省略のある発話、一文として完結しない発話が多数存在し、「文」そのものの認定が困難だからである。談話の構成単位は、談話の実態に則したものでなければならない。

では、談話を構成する単位は何であるか。メイナード(1993)は、PPU(Pause Phrasal Unit)という、ポーズを分割の基準とした単位を提唱している。ポーズは客観的な確認がしやすく、分割の基準として使用する際信頼度が高いと述べられている。しかし、ポーズの切れ目と発話内容の切れ目が一致しないことがある。以下に例をあげる。

(例) 談話③より抜粋

B「イ'シキソ「コマ'デシ「テナ'イト 「カンジル'ンデスガコノ カンジダ'ト  
C 「ア'ー

下線部のBの発話は、ポーズという観点からみると二単位となる。一方、音調句という観点からは一単位になる。この発話の音調を観察すると、「カンジダト」

には上昇音調が認められず、話者Bが「カンジルンデスガコノカンジダト」を一つのまとまりとして発話していることがわかる。筆者は発話内容の連続性を重視すべきであると考え、PPU単位は採用しない。

沖(2001)は、ポーズではなく上昇イントネーションを分割の根拠とする「句」という単位を提唱している。句は、川上夔が音調的単位として提唱した「句」を、談話の最小単位として再定義したものである。談話の場合、音声を媒介とし、即時的両方向的な情報の伝達が行われる。談話参加者は、相手の発話内容の確認だけでなく、自己の発話も同時に確認しながら談話を進行させる。このような性格をもつ談話を研究するにあたり、沖は「音声の正しい認識が必要であり、談話の構成単位の考察が、音声そのものに則して行われる必要がある」と主張する。このような言語観に立脚し、発話の実態を重視する川上の「句」を取り上げている。

川上の「句」は、アクセントの解釈として提唱された概念である。川上(1995)では「生き生きとした、自由な感情に彩られた発話にあっては、(中略)所謂アクセントの型の“姿”では律しきれない種々な形の音調が現れ得る」と述べられている。そして、声の下降を単語のアクセントの特性と捉え、声の上昇を広義のイントネーションを表すものとみる。広義のイントネーションである上昇音調は、発話に音調的な切れ目を感じさせるという。川上は、この音調的な切れ目(句切り)によって隔てられた音調的単位を句と名付けたのである。句とは、その途中に切れ目を感じさせない長さ不定のことばであり、話し手の心情により長さが変わるものである。

川上の概念の重要な要素となるイントネーションは、意味のまとまりを示すものである。この点より沖(2001)は談話単位として句を再定義するのである。実際の談話では、語より大きな単位に対して一定の音調を付加した形で発話がなされることがある。このような談話において、上昇音調を手がかりとするイントネーション単位であり、話し手の考えのまとまりや感情を表す「句」は、談話単位として認定するのに適切であると考え。句の長さについては、川上は「長さ不定」と述べ、沖は「「句」という単位は、あらかじめ定まった長さをもつものではない。話し手の考えること表現したいことに対応して、短くも長くもまとまりをつけることができ」と述べている。

では、音調句はどのような長さをもって実際の談話に実現されるのであろうか。本論では、話者ごとの音調句の長さを測定し、対人関係の変化に応じてどのように音調句の長さが変化するかを明らかにしたい。

### 3. 音調句の様相

#### 3.1 音調句の測定

音調句の認定は筆者が行った。音声録音を行ったテープを耳で聞くことでイントネーションを観察し、音調句を認定した。では、その認定された音調句の長さをどのように測定するか。

野元(国研 1983)では、モーラ数を尺度に反応文の長さを測定している。モーラ数では、文の長さや敬語使用の相関について述べることができる。しかし、「ハハオヤ」と「オカーサン」など類義語についても両者に差をつけてしまう。両語についてのみ比較を行うと、「オカーサン」を使用することにより文全体のモーラ数が多くなる可能性が生じ、「ハハオヤ」を使用した文より丁寧であるという判断の要因となるおそれがある。本論では、一音調句がどれだけの情報を有しているかに着目するため、両語はともに一語とする。

その他の調査単位としては、国立国語研究所(1987)に、「長い単位」( $\alpha$ 単位等)、「短い単位」( $\beta$ 単位等)の記述がある。長い単位とは、橋本進吉の「文節」に重なるものである。この長い単位を使用した場合、敬語使用など対人関係による言語使用の差異が見えにくくなってしまう。談話③(話者Aと話者Cによる談話)における話者Aの発話に「(自分の気持ちを知ってもらうだけでも、自分の心持ちは)チガクナルジャンイデスカ」という一音調句が観察されたが、文節を尺度とするとこの一音調句は度数1となる。同じ内容を友人である話者Bに向けて発話すると仮定すると、「チガクナルジャン」となるだろう。しかしこれも前者と同様度数1となり、両発話の形式の違いが反映されない。本発表では、より細かな言語使用の変異を明らかにすることが目的であるため、長い単位は採用しない。

一方、「短い単位」にあたる $\beta$ 単位は操作的に規定される単位であり、その原則は形態素である。 $\beta$ 単位の性質については、「 $\beta$ 単位が中間的な単位であるために、単語でも形態素でもないという欠点をもつとともに、ある程度まで両方の性質をあわせもっている(後略)」(国研 1987)と述べられている。 $\beta$ 単位と単語の関係については、「 $\beta$ 単位を採用した調査では、助詞・助動詞を自立語と別に集計することがおこったが、自立語だけで考えれば、 $\beta$ 単位と単語とのくいちがいは、それほど、大きいものではない」と述べられている。本論では、この単語を音調句測定の尺度とする。ただし、日本語において単語の認定は研究者によって異なる。そこで本論では、客観的な把握が比較的容易であると考えられる、橋本(1944)の定義する「語」を尺度として各音調句の長さを測定した。

(例) 調査① 話者Aの発話より抜粋

ウ「チワー」 コ「ノイ'ケン」 ヒ「ハンテキナ'ンダヨネ」  
           2                  2                                  5

各談話において、発話権を所有し主な話し手となっている際の発話を分析対象とした。聞き手である際のあいづちなどは本論では分析対象外とした。観察された音調句を語によって測定し、構成語数をもとに集計した。そして、談話相手により各話者の音調句の長さなどのような変化が現れるかを比較した。

### 3.2 音調句の構成語数の分布

3.1節に述べた方法で各音調句を測定した結果を以下に示す。図1、図2は話者ごとの構成語数がどのような割合で分布しているかを棒グラフに表したものである。表1から表4には具体数と割合を示した。

#### 3.2.1 話者Aの発話における音調句

図1 話者Aの発話における音調句

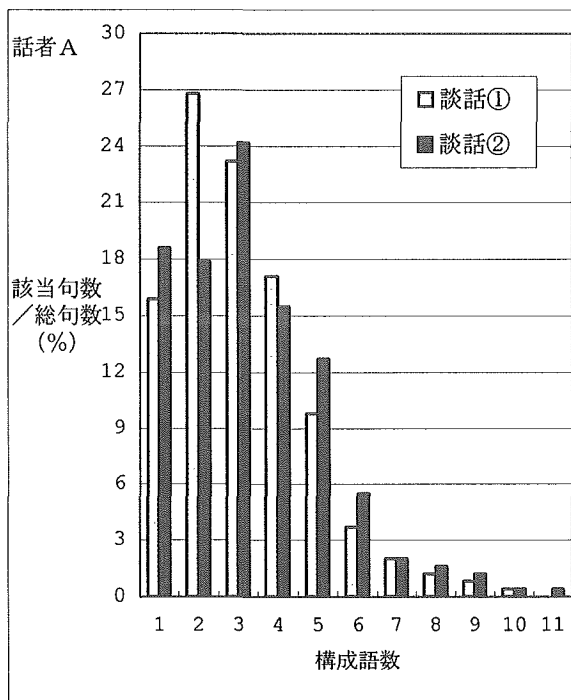


表1 調査①

構成語数	該当句数	(%)
1	39	15.9
2	66	26.8
3	57	23.2
4	42	17.1
5	24	9.8
6	9	3.7
7	5	2
8	3	1.2
9	2	0.8
10	1	0.4
11	0	0
総計	248	100

表2 調査②

該当句数	(%)
47	18.6
45	17.9
61	24.2
39	15.5
32	12.7
14	5.5
5	2
4	1.6
3	1.2
1	0.4
1	0.4
252	100

話者Aの発話における音調句の長さの変異に関して、談話①と談話②では全体的

に似た傾向が見られるが、注目すべきは割合の最も高い構成語数が異なっている点である。談話①では、二語構成句が26.8%と最も高いが、談話②では17.9%に減少し、三語構成句の割合が24.2%と最も高くなっている。また、談話②においては五語構成句、六語構成句を中心に総じて高くなっていることがわかる。僅差ではあるが、[親・同輩]の関係にある友人との談話①より、[疎・目上目下]の関係にある話者Cとの談話②における音調句が長く実現される傾向が指摘できるだろう。

### 3.2.2 話者Bの発話における音調句

図2 話者Bの発話における音調句

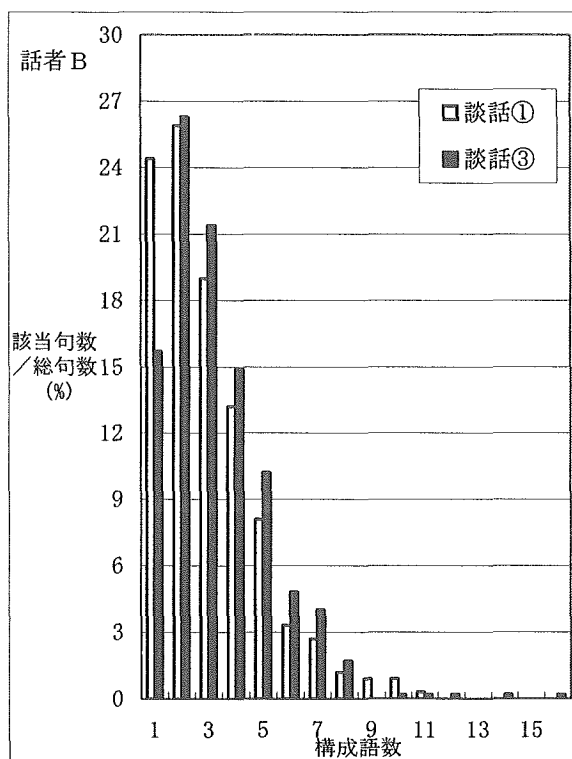


表3 調査①

構成語数	該当句数	(%)
1	81	24.4
2	86	25.9
3	63	19
4	44	13.2
5	27	8.1
6	11	3.3
7	9	2.7
8	4	1.2
9	3	0.9
10	3	0.9
11	0	0
12	0	0
13	0	0
14	0	0
15	0	0
16	0	0
総計	331	100

表4 調査③

該当句数	(%)
85	15.7
143	26.3
116	21.4
81	14.9
55	10.2
26	4.8
22	4
9	1.7
0	0
1	0.2
1	0.2
1	0.2
0	0
1	0.2
0	0
1	0.2
0	0
1	0.2
542	100

話者Bの場合、談話①談話②ともに二語構成句の割合が最も高く、それぞれ25.9%、26.3%を占めている。よって両談話の差は二語構成句以外の分布に求められる。まず一語構成句について、談話③では8.7%減少していることがわかる。これは、談話③では話者Bが一語構成句を避け、二語以上で音調句を構成し発話

しようとする態度の現れとみることができよう。また、三語から八語で構成されている音調句数の割合が総じて高くなっている。また、談話③では談話①ではみられなかった十語以上の音調句が観察された。これらの点より、話者Aと同様対人関係が音調句の長さに影響を与える要因の一つであることを指摘できるだろう。

### 3.3 考察

以上、話者A話者Bともに相手との関係により音調句の長さが異なることが指摘できる。〔親・同輩〕の関係にある相手との談話では音調句がより短く構成され、〔疎・目上目下〕の関係にある談話ではより長く構成される傾向がみられた。

この傾向の差の要因には、以下の三点が考えられる。

- a. 敬語使用
- b. 相手との心理的距離感
- c. 自己の意見に対する確信度

要因としてまず考えられるのは、aの敬語使用である。本発表では、語によって音調句の長さを測定しており、各話者の敬語使用が分布に反映されたと考える。同じ意見をいう場合にも、〔疎・目上〕の相手には敬語を使用する。敬語部分に上昇イントネーションを付加させることは少なく、一音調句としてまとまることが多い。

次に、bの相手との心理的距離感があげられる。話者が談話相手との間にどの程度心理的距離感をもっているかが発話態度に影響を与える。同輩で親しい関係にある相手とは心理的に近い距離にある。そのような相手との談話において構成語数が少ない音調句に集中するのは、言いたいことをまとめる前に発話することが許される間柄にあるという意識が話者に働くからであろう。本発表で扱った談話資料においても、思ったことや自分の意見を直接的に述べている様子がうかがえる。一方、ほぼ初対面であり年齢、社会的立場に差がある相手に対しては、相手が理解できるように話さなければならないという意識が働く。自己の意見に対する理由づけの必要性が〔親・同輩〕との談話より高く、そのような発話が一音調句で発話されることが多い。目下の関係にある話者は意見表明に際し、相手への伝達度を考慮するため、発話内容を考え、よりまとまりを意識した発話をするといえる。その結果、構成語数の多い音調句の割合が高くなるのであろう。

cの自己の意見に対する確信度は、bの心的距離感と密接な関係にある。相手と〔親・同輩〕の関係にある場合、自己の意見への確信度が低くても相手に意見を言うことができる。確信度の高低に関わらず発言し、お互いに意見を述べ合うことで談話が進行するのである。相手と〔疎・目上目下〕の関係にある談話では、



意見表明に高い確信度が必要となる。目上である相手の話を聞きながら自身の意見を構築した上で発話をするため、音調句がより長く構成されると考える。

#### 4. おわりに —まとめと課題—

以上、対象とした東京方言談話において、対人関係により音調句の長さに変化する傾向があることを述べた。従来、ことばの使い分けに関する研究は文を単位とすることが一般的であったが、音調句という単位を用いることで新たな視点からこの問題を論じることができることを述べた。しかし、課題も残る。

a. 音調句認定に際した問題

b. 談話資料の性格の位置付け

a に関しては【注】でもふれたように、大きく二点の問題点がある。b は談話資料の性格に関する問題である。談話には様々な性格をもつものが存在する。本論では、意見交換という課題を持った談話を分析したが、課題のない自由な雑談の場合や、インタビューに見られるように目下がより情報量を有しているような談話資料等はとりあげていない。今後は情報量や話の複雑さなど、談話の質を考慮したうえで研究を進める必要がある。

ところで、本論で得た知見は日本語教育における音声指導にも応用できるだろう。多くの日本語学習者は、自分が話す日本語の自然さ流暢さに大きな関心を持っている。音声面での指導を求める声も多い。この時学習者が問題としているのは、語のアクセントではなく、発話全体の音調であることがほとんどである。この原因の一つは、より大きな側面での音声指導の方法が確立されていないことにあるのではないだろうか。先行研究において指摘されているように、従来の音声教育は単音から韻律という順番で行われることが多い。時には語としての音声教育はなされても、発話全体の音調に対する指導が十分に行われなかったこともある。佐藤(1995)では、学習者の日本語の自然さの評価には、韻律の様々な要素が大きく影響していると報告されている。学習者により自然な発話を習得させるためには、単語を超えたより大きな単位での指導が必要であり、その際本論で述べた音調句が有効であるといえるだろう。今後は音調句を単位とした対人距離調節の指導へとつなげたい。

音調句に共通する概念として、松崎(2001)が音調の「ヤマ」を提唱している。松崎は、図や身振りで「ヤマ」を把握させる方法を提案しているが、音調句に関しても指導法や教材開発へのさらなる応用が可能であると考えており、今後の課題としたい。

【付記】信州大学大学院人文科学研究科へ提出した修士論文『句からみた談話展開』（平成13年度）をもとに、2002年度国語学会春季大会において口頭発表（ポスター発表）を行った。本論文はその発表内容に加筆、修正したものである。口頭発表の席上では有益なご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

### 【注】

i なお、談話を音調句で区切っていく過程で、以下の二点が問題となることが明らかとなった。

(1) 一語(一文節)に二回以上の上昇音調が現れる

例1 A 「ウン

B 「ダ' シ' ー ハ「ハオヤ「ノ' コー ス「ト' レスッテ' ノワコ「ドモニ' モ

(2) 上昇音調を含む特徴的な音調が付加された終助詞などの扱い

例2 A イ「ッショニ「一' クラスオ「バ' ーチャントカモ「サ' ー オ「バ' ーチャントユーカ

例1は「ハハオヤ」に続く格助詞「ノ」が上昇音調とともに発話されている例である。通常であれば{ハ「ハオヤノ}と発音されるものである。例2は、談話中に頻繁に観察された音調である。この発話は、「イッショニクラス|オバーチャントカモサ」全体で、一つのまとまりを表している。音調句としては{オ「バ' ーチャントカモサ' ー}であれば上昇音調が一個所であり、一句となるが、この例では{オ「バ' ーチャントカモ「サ' ー}と二個所に上昇音調が見られ、形式的には二句となる。しかし、音調句は意味のまとまりを示すということを考慮すると、間投助詞だけを取り出して1句とすることには問題があるだろう。この問題点をどう解釈するか。本発表では、前者を卓立音調として、後者を間投詞的機能を持つ音調（山口1993）として捉え、独立した一句とは認定しなかった。この問題点に関して先行研究では具体的に指摘されていないが、更に考察していかなければならないものである。

ii 話者Aに移動歴はない。話者Bは移動歴があるが、同一区内での移動であるため、母方言への影響はないと考える。

### 【参考文献】

池上嘉彦(1983)「テキストとテキストの構造」『日本語教育指導参考書 11 談話の研究と教育 I』国立国語研究所

沖裕子(2001)「談話の最小単位と文字化の方法」『人文科学論集〈文化コミュニケーション学科 編〉』第35号 信州大学人文学部

- 川上 蔡(1956)「昇降調の三種」『音声学会会報』第 92 号 全日本音声学者総合学会
- 川上 蔡(1992)「うなづきと下降調」『学芸 国語国文学』24 号
- 川上 蔡(1993)「伸ばし下げ音調をめぐる」『音声学会会報』第 203 号 日本音声学会
- 川上 蔡(1995)『日本語アクセント論集』汲古書院
- 金田一春彦(1951)「コトバの旋律」『國語学』5 号 國語学会
- 金田一春彦(1958)「東京アクセントの特徴は何か」『言語生活』8 月号 筑摩書房
- 国立国語研究所(1983)『国立国語研究所報告 77 敬語と敬語意識 岡崎における 20 年前との比較』国立国語研究所
- 国立国語研究所(1987)『国立国語研究所報告 89 雑誌用語の変遷』国立国語研究所
- 国立国語研究所(1987)『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相 一座談資料の分析一』国立国語研究所
- 佐藤友則(1995)「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」『世界の日本語教育』5 国際交流基金
- 杉藤美代子(1988)「談話におけるポーズとイントネーション」『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻(上)』明治書院
- 杉藤美代子(1997)「話しことばのアクセント、イントネーション、リズムとポーズ」『日本語音声 2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂
- 泉子・K・メイナード(1993)『会話分析』くろしお出版
- 野元菊雄(1983)「場面と敬語段階」(国立国語研究所 1983 所収)
- 橋本進吉(1944)『橋本進吉博士著作集第 2 編 国語法研究』岩波書店
- ポリー・ザトラウスキー(1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- 松崎 寛(2001)「日本語の音声教育」(城生佰太郎編(2001)『日本語教育学シリーズ(第 3 巻) コンピュータ音声学』おうふう編 2001 所収)
- 山口幸洋(1993)「撥ね下がりにイントネーションについて」『音声学会会報』第 202 号日本音声学会